

豊臣大坂城天守を描いた屏風に関する考察

正会員 佐藤大規

大坂城 天守 城郭 屏風 豊臣秀吉

一、緒言

秀吉が天正十三年（1585）頃築造した大坂城天守の外観を知る資料としては、「大坂夏の陣図屏風」・「大坂冬の陣図屏風」・「大坂城図屏風」などがある。これまで、古川重春氏¹⁾や宮上茂隆氏²⁾などによって復元案が提示されているが、そのほとんどが「大坂夏の陣図屏風」を根拠に復元したものであって、「大坂冬の陣図屏風」や「大坂城図屏風」を用いた復元はほとんどない。しかし、「大坂夏の陣図屏風」を詳細に検討してみると、建築学的問題点が少なくないことや豊臣時代の大坂城の指図とされている中井家蔵「本丸図」³⁾との矛盾点が見られる。

そこで本稿では、「大坂夏の陣図屏風」の問題点を挙げた上で、「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」の資料的価値を考察することにした。

二、屏風の概要

「大坂夏の陣図屏風」

この屏風は、黒田長政が大坂夏の陣後に描かせたものと考えられている。天守は五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、南西面が描かれている。屋根構造は、まず一重目を南北方向の入母屋造として、二重目は層塔式遞減させる。その上の三重目を一重目と同じく南北方向の入母屋造として、さらにその上に四重目と五重目からなる望楼を載せる。また一重目の西側には千鳥破風を二つ、二重目と四重目にもそれぞれ千鳥破風を一つずつ、また五重目には軒唐破風を設けている。

「大坂冬の陣図屏風」

この屏風は、大坂冬の陣後、狩野派の絵師が描いたものを幕末になって同じ狩野派の絵師が模写したものと考えられている。天守は五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、北西面が描かれている。屋根構造は、まず一重目は層塔式遞減させ⁴⁾、二重目を東西方向の入母屋造としている。三重目は、二重目と棟の向きを互い違いにして、南北方向の入母屋造として、さらにその上に四重目と五重目からなる望楼を載せる。また二重目の西側には唐破風の出窓、四重目の西側には入母屋（千鳥）破風⁵⁾、一重目の北側には付庇を設けている。

「大坂城図屏風」

この屏風は、大坂冬の陣以前に描かれたもので、豊臣大坂城天守を描いたものとしては最も古いものと考えられている。天守は、五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、北西面が描かれている。一階と二階を北面を除いて

同大として、二重目を東西方向の入母屋造とする。三重目は二重目と棟の向きを互い違いにして南北方向の入母屋造として、その上に四重目と五重目からなる望楼を載せる。また四重目の西側には入母屋（千鳥）破風⁶⁾、北側には「大坂冬の陣図屏風」と同様に付庇を設けている。

三、「大坂夏の陣図屏風」の問題点

まず、二重目を層塔式遞減させているが、このように中間層にのみ層塔式遞減を用いた天守は例がなく、同大の描き誤りと考えられる。また中井家蔵「本丸図」によると大坂城天守の一階平面は、東西十二間に南北十一間で、東西方向が長辺となることが明らかとなっている。日本建築では、長辺を平側とするのが普通である。すなわち大坂城天守では、東西が平、南北が妻となるはずであるが、この屏風ではそれが逆に描かれている。また一重目の入母屋造の大棟が二重目の屋根の下に納まる構造になっているが、一階平面の妻側は十一間で長大で、ここに入母屋破風を設けると二重目の屋根を突き抜けるほどになるはずである⁷⁾。それを二重の屋根の下に納めるようになると、実際には一階の壁面が二階分の階高になってしまう。すなわち作図上のごまかしがあって、文字通りの絵空事と言える。

以上のように、「大坂夏の陣図屏風」には問題点が少なくない。この屏風は、大坂夏の陣によって天守が焼失した後に描かれたもので、絵師の記憶や伝聞などによって描かれた可能性が高く、大坂城天守の姿を正確に描いている可能性は低いと言える。

四、「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」

「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」に描かれた天守は、ともに二重目を東西方向の入母屋造、その上の三重目を南北方向の入母屋造としている。また一重目の北側には、天守建築には珍しい付庇⁸⁾が設けられていて、構造はほとんど一致していると言える。また四重目に設けられた千鳥破風を入母屋造の屋根のように書くという誤りも一致している。

その一方で、相違点もいくつか見られる。まず、「大坂冬の陣図屏風」では付庇と一階の階高が同じ高さになっているのに対し「大坂城図屏風」では付庇の土台の線を一階の隅から斜めに引いている。中井家蔵「本丸図」によると、この付庇が設けられていたと考えられる武者走は、天守本体から五尺下がっていることが分かる。「大坂城図屏風」では、付庇と一階の床高が違うということ

を付庇の土台の線を斜めに引くことで表したと考えられる。また「大坂冬の陣図屏風」で一重目を層塔式通減させているが、そのような望楼型天守は例がないことから、「大坂冬の陣図屏風」が誤っていると言える。以上のことから、「大坂冬の陣図屏風」の天守は「大坂城図屏風」の天守を直接または間接に模倣して描いたと考えられる。ところで、「大坂城図屏風」では天守の北側の極楽橋と考えられる箇所には珍しい望楼を載せた唐破風の廊下橋を描いている。『義演准后日記』慶長五年五月十二日条⁹⁾によると大坂極楽橋から二階門を豊国神社へ移築したとある。この二階門は望楼を載せた唐破風の廊下橋を指すと考えられ、「大坂城図屏風」の描写の正確さの証左となり、また「大坂城図屏風」の成立時期が慶長五年五月以前であることが分かる。

五、結語

これまで豊臣大坂城天守を復元する際の一級資料とされてきた「大坂夏の陣図屏風」は、問題点が少なくないことを明らかとした。それに対し「大坂城図屏風」の天守は、構造的な問題がほとんどなく、北面の付庇という天守としては特異な点を描いていること、中井家蔵「本

丸図」と完全に一致することなどが特色である。また筆者が復元した安土城天主¹⁰⁾は、一階と二階を同大として、二重目を入母屋造、その上の三重目は棟の向きを互い違いにした入母屋造となった。この形式は「大坂城図屏風」の天守の特色と一致するものである。初期の天守の形式を考察する上でも「大坂城図屏風」は重要とすることができる。

註

- 1) 古川重春『日本城郭考』(巧人社 昭和七年)参照。
- 2) 『大坂城』(日本名城集成 小学館 昭和六十年)参照。
- 3) 宮上茂隆「豊臣秀吉築造大阪城の復元的研究」(『建築史研究』37号)参照。
- 4) 望楼型天守で、初重に層塔型通減を用いた例はない。これは、後述するが、模倣した際の描き誤りで、一階と二階は同大であったと考えられる。
- 5) 四重目は入母屋造のように描かれているが、大坂城天守に続いて築造された岡山城天守や広島城天守では、四重目は層塔型通減を用いていることから、千鳥破風を誤って入母屋造としてしまったと考えられる。
- 6) 註5)参照。
- 7) 古川案やそれをもとにした復興大阪城天守の屋根のようになる。
- 8) 類例は備後福山城天守しかない。
- 9) 「次豊国明神ノ鳥井ノ西ニ、廿間斗ノ二階門建立、大坂極楽橋ヲ被引了。」
- 10) 佐藤大規「安土城天主」(日本建築学会学術講演梗概集 平成17年)参照。



図1 「大坂夏の陣図屏風」天守部分

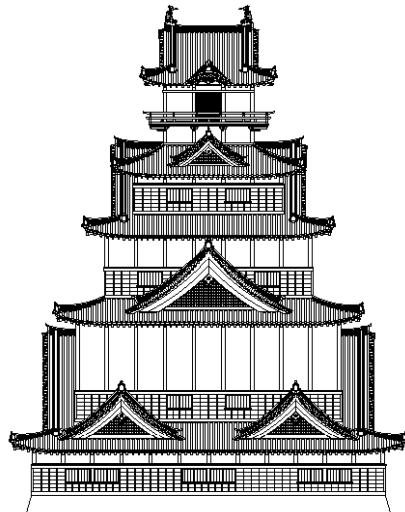


図2 「大坂夏の陣図屏風」に基づく階高



図3 「大坂冬の陣図屏風」天守部分

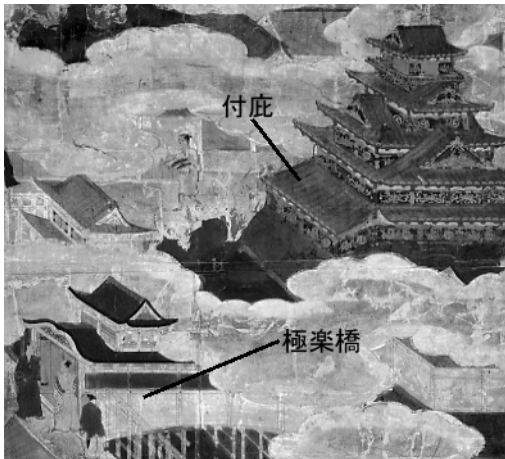


図4 「大坂城図屏風」天守および極楽橋部分

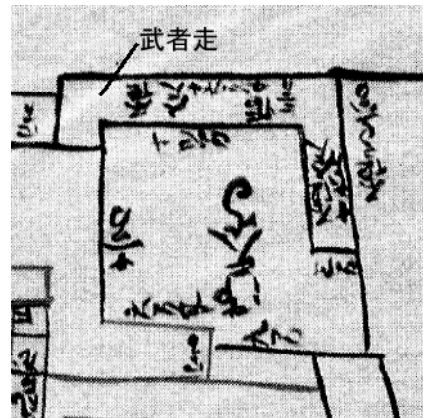


図5 中井家蔵「本丸図」天守台部分